

# 卒業式式辞

平成 7 年度

本学 2 年間の課程を終えて、卒業する諸君は短大472名、専攻科14名です。本日、目出度く卒業を終えて社会に巣立って行く皆さんの前途を祝して、心からおめでとうと申し上げます。

入学して間もないころ松本サリン事件があり、年が開けると阪神淡路大震災が起り、続いて地下鉄サリン事件、昨年末には増殖炉「文殊」のナトリウム漏洩問題がありました。この 2 年間に細川、羽田、村山、橋本と内閣が変わりました。このような目まぐるしい世の中に、諸君は今日から乗り出して行こうとするわけです。今日はそのことを前堤と致しまして、いささかの考えを述べ、門出のはなむけと致します。

門脇上智大学教授は世界という雑誌の中で次のように書いています。

私は魂の荒廃から脱出するために、一人静かに端座し、新約聖書を取って何気なく開いた。私の目に飛び込んできたのはルカ福音書の次の聖句だった。

イエスは群衆に言われた。「あなたがたは南風が吹いているのを見ると、「暑くなる」と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることを知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」

イエスの言葉はオウム心理教に躍らされている「今の時代を見分けることを知らない」私の無知を、クッキリと照らした。認識論上の「無知」を考察する上で、私達は憶測と「真実」の根本的な差異を自覚する必要がある。憶測はそれが事実であることを確かめずいいかげんな見解でお茶を濁し、真実を見ようとしな。真実とは憶測と違い、長く苦しい探求のプロセスを経て、はじめて知ることができるものである。まず正確に現実を認識しなければならぬ。

オウム現象を見て、現実の感覚的認識と本質直感と真実在の 3 つのレベルを正確に区別して「真実」を見ることが大切だ。憶測にはこの 3 つがかげ。オウム報道の憶測に基づいて判断する私達日本人は、3 つのレベルで認識論的「無知」中に住んでいたという反省をしている。

別の見方が週刊朝日に載っていました。「オウム心理教と言う教団は、日本の鏡なのだ。象徴制や階級制のようなものがあり、マニュアルに従って忠実に行動する日本と日本人の姿がそこに映っている。偏差値教育で育ち、逐次設定された目標をクリアする。その達成感を求めて頑張ってきた日本の優秀な若者達が映っている。」という風に見る人もいます。

特定の宗派的教育及び活動を支持するわけではありませんが、宗教上の情操の涵養ということ

はおおいに努力しなければなりません。日常として、人間としての規範、徳、宗教心を心にしっかりと持たなければならぬことを教えてくれたように思われます。

オウムの話はこれくらいにして、今年の初めころあった、宇宙飛行士若田さんがエンデバーで出発する模様を思い浮かべてください。遙か彼方の地球の裏側から情報が飛んでくる。卒業した諸君が住む21世紀は、情報化社会です。情報が物やエネルギー以上に有力な資源になり、情報の価値の生産を中心に社会、経済が発展していく社会です。通産省産業構造審議会では情報社会を「人間の知的創造力の一般的開花をもたらす社会」と定義しています。似た言葉に脱工業社会(Post industrial society)があります。ダニエル・ベル(米)の唱えた未来社会です。

私がアメリカに留学した1953年頃、500ドルで買ったシボレーを持っていました。日本が車社会になるとは決して思っていませんでした。ところが今は皆さんの知っての通り、目の前にインターネットの世界がそこまできています。パソコン導入に抵抗を示す人もいます。「私はパソコンなど使わなくても生産性が高い」という社員に、社長は「パソコン無しでビジネスの新しい仕組みが実現できることを証明する」企画書の提出を求めました。企画書は出ませんが、パソコンは導入されました。社内の通達はすべて電子メールになったほか、誰もがアクセスせざるをえなくなり、目にみえて生産性が上がったという話もあります。

自ら情報を駆使し、戦略性をもって仕事をこなす役割を期待されるに違いありません。単にOA機器やコンピュータの操作ができるだけでは不十分で、洪水のようにあふれ出る情報を自らの判断で処理し、実務の展開に結びつけることのできる能力が求められているのです。これはみなこれからのあなたがたが、自分でやらなければなりません。そうです。「卒業したから勉強しなくてよい」とは誰も言いません。卒業することを英語で「Commencement」といいます。これから皆さんは「Commencement」を機に、自分の勉強を始めてください。その仕方は十分この大学で学びました。

卒業した皆さんがこれから進んでゆく世の中では間違いなくぶつかるものがあります。それは色々な困難です。そこで柯藍の散文詩「困難」を送り餞とします。

友よ君は仕事や暮らしの中で、困難にぶつかったことがあるだろう。

私の心の中で、困難は常に勝利と共にある。

困難、それは一筋の河。勝利、それは河の向こうの山。

河を渡ればすぐ山に登れる。河だけが見えて山が見えないのはいけない。

しかし、山だけが見えて、困難が見えないのもいけない。

困難は常に君の前に立ちほだかり、君の辛抱強さを試し、君の勇気と力を試そうとする。

君は次第に気がつくだろう、困難が仲間を作りたがるのを。

小さな困難は君より大きな困難を引き合わせる。

もし君が何時も困難から身をかわそうとしないなら、

困難は君にますます多くの知識と胆力を与えるであろう。

そしてついには、彼らは君に道を譲り、君を送り出すであろう。

もし興味があるなら、君は後ろを振り返って、困難という名の友人達を見給え。

困難に向かって手を差し伸べようではないか。

生活の中で、困難は君にとって最良の友なのだ。

幾多の困難を乗り越えて輝かしい21世紀を築き上げていただきたい。終わりに臨み皆さんの健康をお祈りします。 (H 8. 3. 15)

## 平成 8 年 度

短期大学の2年間の課程を終えた443名それに加えて専攻科8名の皆さん、本日ここにめでたく卒業の日を迎えられたことに対し、心からお喜び申し上げます。

門出に当たって、手向けの言葉として、「立場」のことについて、少し述べてみたいと思います。「あの人には、あの人の立場がある」とかいうときの、あの立場です。皆さんにも今まで、学生という立場、長女とか次女という立場、運動部主将であったり、会計担当であったりする立場、いろいろな立場があったはずですし、あるはずであります。立場にはいろいろなものがあるでしょうが、社会生活の中で立場が問題となるのは、たいていの場合、責任と義務とが組み合わされているときですが、今日の私の話は、責任と裏表の関係で言われる立場が中心です。

ビジネス意識や能力開発のための研修を行う会社の社長さんで、藤田桂子さんという方がいます。このひとは日本航空のステュワーデスから転職を決意して、「男女同一賃金で、職域に差のない」外資系貿易会社の社長秘書に応募した時のことで、目から鱗の落ちる話をしていますので、これを紹介します。

採用試験におけるプレゼンテーションの時間は15分。聞かれたことに答える以外に、自分のできることは何か、と質問されました。「英語は何とか話せます。テレックスが打てます。タイプができます。ビジネスレターが英語でかけます。健康で根性があります。」と自己紹介したところ、「せっかく仕事を休んで面接を受けにきたのだから、今言ったことの裏付けを、実際の仕事で見せて下さい。それから帰ってください。」ということになりました。青焼き、タイプ、和文英訳などの仕事が次々と与えられました。それから資料のファイリングを終わったところで、「A社に電話して、このことで部長と交渉してください」、また、「アメリカのB社のCさんに電話をかけ、ネゴシエーションしてイエスの返事を貰ってください」といわれました。午前10時から夜の9時まで、仕事ぶりを見られた後で賃金交渉に入りました。ビジネスの交渉能力がなかったので、メッキがすっかりはがれてしまった私(藤田)は、「今日はぜんぜん働けませんでしたし、自宅から通えるので、年収は日本航空の半分で結構です。むしろ、この会社で私を育てて下さい。」とお願いしました。ところが、「会社は女

性を育てる機関ではない」と言われましたが、結局、給料が半分でよいというのが見所となって、この会社に採用されました。

更に彼女は続けます。

私はそれまで、女性が責任ある仕事を任されるのは、格好のよいことだとあこがれていました。しかし、責任をもたされるのが、いかに大変なことか骨身に染みてわかることが起こりました。ある朝、起きると熱がありました。その日の午後は大切な会議があり、上司の作成した資料をタイピングする必要があったのですが、欠勤しようと思って、朝の7時30分頃に電話しました。すると、総務部長が電話に出て、もう社長が資料を持って出勤しているというのです。社長は電話に出ると「その程度で会社にこられないなら、辞めてしまえ。」といわれたのです。電話のやり取りを横で聞いていた母が、その話を父に伝えると、父は、「この社長はすばらしい。私も男性の部下にはしょっちゅうそういうことを言っているが、女子社員に辞めてしまえなんて言えるのは、一人前に見てくれている証拠だ。何はともあれ行って、仕事をして、どうしてもだめだったら社長の許可を貰って帰ってきなさい。」というのです。この日を境に、私の意識が変わりました。それまでは、こんなに一生懸命やっているのだからと、自分の立場だけで考えていたのですが、その日からは、上司の立場や、会社の視点から行動を考えるようになったのです。

現在の私は、比治山女子短大と比治山大学の学長の地位にありますから、それが私の立場の大半であり、1日の私の行為の恐らく90%くらいが、この学長としての立場につながっています。今日、この席でお話するのも、学長の立場がさせるのであって、式辞であるとか、挨拶などのような堅苦しいものは、私の得意とするところではありません。卒業式を主催するのは、学長の立場にあるものの責任であり、式辞を述べるのは、義務です。

このように、人はある立場に置かれますと、必ずその立場に伴って、責任や義務が生じます。これから皆さんは、それぞれの新しい地位を得て、世の中に巣立ってゆくのですから、皆さんはそれぞれの地位・立場に応じて責任や義務が何であるかをよく判断し、わきまえておくことが必要です。自分の置かれた立場、それに伴う責任と言うものをよくわきまえて行動して頂きたい。これが今日申し上げることの中心です。

誤解のないように断っておきますが、立場を忘れないことと、立場に縛られることとは、大違いです。その違いをまず考えて頂きたいのです。立場を忘れてはいけませんが、立場でしか物が言えないとか、立場でしか行動できないというような人間になってもらっては困るのです。立場でしか物が言えない人と言うのは、一見、責任に忠実な人であるかのようですが、その実、教条的であり、閉鎖的であり、広い視野からする責任を取ろうとしない人です。官僚的という言葉の意味するところは、多くこの種の行動に対する批判です。与えられた権限範囲で責任をまっとうすることは、社会人として重要ですが、自分の立場があれば、相手の立場もあると言う初歩的な事実をどう認識するか。この相違が、判断や責任の取り方の相違となり、ひいては人格の相違と

なって現れるのです。

立場に縛られないで、自由な判断をし、行動することは、一見、格好よいことですが、危険でもあります。もし、自分の立場を、全く無視して行動したとすれば、多くの場合、それは立場に伴う責任を放棄したことを意味します。無責任と誹られるでしょうし、そのような人を信頼するわけにはいきません。「立場を忘れないで、しかも立場に縛られないためには、相手の立場をよく理解した上での判断でなくてはならない。」ということになるでしょうが、これは決してやさしいことではありません。そこで必要となるのが、自主性です。この自主性は、理性と悟性に支えられたものでなくてはなりません。理性と悟性に支えられた自主性とはどんなものか。それは、一貫した行動原理をもつ、ということです。

長い人生の中で、いろいろな毀誉褒貶があるでありましょう。誉められることがあれば、けなされることもあります。どちらも自分の行為に対する他人の評価です。評価や批判を恐れてはなりません。自らの行動原理に照らして誤る所がなければ、人が何と言おうと良いではありませんか。人はまず、その置かれた立場をわきまえなくてはならない。次は立場に伴う責任を果たさなくてはならない。そして、一貫した行動原理を持たなければならない。これらのことを心掛けて頂きたいのです。皆さんの健闘を祈ります。

経済学者ドラッカーは21世紀はボランティアの世紀であると言っています。「人間の経済的欲求から更に心の豊かさを求める時、ボランティアは第2の仕事になり、自己実現、生きがいに繋がるもの」だと言っているのです。

米国のボランティア人口は9800万人で2人に1人の割合、日本では410万人で30人に1人という違いがあります。ボランティアの歴史の背景がなく、日本人にボランティアの遺伝子が欠けているのではないかといわれ、意識改革のできていない現状にあって、皆さんは立派な仕事をしました。心からお礼を申し上げます。この精神を持ち続けて頂きたいのです。

卒業式の時に話した藤田さんは、女性の意識は「劇団四季型」と「タカラヅカ型」に二極化していると言っています。

劇団四季では、オーディションを重ねて実力で役を勝ち取るわけです。このタイプは、結婚しても子供を産んでも仕事を続ける人です。昇給や昇格にも熱心で、チャンスがあればリーダーになることを望むだけに、頑張る力もあります。しかし、このタイプは日本では非常に少なく、7%位しかいないそうです。「劇団四季型」の女性は、定年までの仕事を考えていますから、上に立つものにとっては、女性という意識を持つよりも、男性と同様の範疇で見ることができる。一般的に「劇団四季型」の女性は、旧タイプの男性と同様に、「森林思考」であり、そこから枝、木、森林へと物事を発展させて考えるタイプです。

残りの93%は女性が男役を演じる宝塚歌劇のタイプです。「タカラヅカ型」は、取り敢えず結婚や子供が生まれるまでという短期的なスパンで仕事をしており、昇給や昇格よりも、職場の人間関係や雰囲気、仕事の楽しさによって仕事を選んでいきます。感情や感覚に左右される面もありま

すから、その特徴を理解することが必要です。このタイプの女性が、「タカラヅカ型」というわけです。

この型は更に3つのタイプに分けられます。その一つが「キャリアウーマン予備軍」で2～3割です。試験などで優秀な成績をとる能力もあり、上司の教育次第では「劇団四季型」に移行する可能性があり、女性のリーダーになる可能性もあるタイプ。次に、女性の大多数を占める「中間型」で、このタイプは、与えられた仕事はしっかりこなすけれども、全体を見て能動的に動くことはしないという特性があります。「葉っぱ一枚思考」、つまり一枚の葉っぱを見たとき、あるがままの姿しか見ないタイプのことです。「葉っぱ一枚思考」の人は全体を見通すような見方が苦手です。反対に、与えられた仕事を掘り下げて、その部分でのスペシャリストになることは得意です。ものごとを短期的に捉え、仕事も自分を中心にした狭い部分で考える傾向があります。「葉っぱ一枚思考」は完全に個が優先されますから、「森林思考」のように、全体を見た上で自分の役割を理解するということがなく、相手の好き嫌いなどが問題となり、自分が組織全体の中のパーツとして何をなすべきかが考え難い。葉っぱ思考の人は、組織全体より個を優先させるので、理不尽な命令には決してうなずこうとしません。企業としては森林思考の方が仕事がスムーズに進むので、こうした人材を求めるあまり女性を敬遠しているのではないのでしょうか。このほかにミラー型があります。

労働人口の減少に伴い「森林思考」の男性だけではビジネスができなくなることは目に見えています。平均的には、女性の総合職はわずか5%ですが、もっと総合職をせめて中間職という形で女性の戦力を増やすことを検討している企業もあります。全社的な立場、上司の立場に立って考えることのできる女性が非常に少ない。リーダー格となる女性を育てることが大切なのです。上に立つものとしては森林思考が望ましい。木を見て森を見ずということのないように心掛けて下さい。

ライフプランとしては、男性の場合は学校を卒業したら会社に入り、結婚しても仕事を続けて定年を迎えて老後ということになります。女性の場合は学校を卒業して就職し、結婚や子育てを契機に休職や退職し、子供が大きくなってから再就職、親の老後を見送る。というように細切れ状態で過ごすことが多いのです。この細切れの節目は、自分の努力だけでは到底クリアできません。ですから細切れ状態で、取り敢えず近い目標に向かってスパンを短く区切らざるをえないのです。

こうした傾向は最近では、女性だけでなく男性にも見られます。高倉健のような「劇団四季型」の旧タイプと、キムタクに代表される「タカラヅカ型」の新タイプがあるように感じられます。これは年齢や世代の問題だけでなく、団塊の世代以降のあらゆる世代においてみられる傾向といえるでしょう。

今日は皆さんの人生の中で1つの大きな節目です。今日をもって学校教育を卒業するわけですが、社会人としては今日が発足の日です。本当の学問も今日から始まります。昨日までの学校教

育は、ある意味ではお仕着せの学問であったかもしれませんが、今日からの学問は、皆さんの一人一人の内発的な要求からする、本当の学問です。

気を引き締めて、一層学問に励んでいただきたいと思います。(H 9. 3. 15)

## 平成 9 年 度

本日ここに、多数の来賓の臨席を頂き、待ちに待った比治山大学第1回の卒業式を迎えることになりました。比治山大学現代文化学部を卒業する皆さんは217名であります。今日めでたく学業を終えて社会に巣立って行く皆さんの前途を祝って心からおめでとうと申し上げます。

1998年の暮開けはアジアの経済危機と日本の金融恐慌の兆し、政党の分解や連合の話とめまぐるしく変化と再生の情勢を見せています。皆さんの生まれた頃の1976年の国家予算は24兆3000億円、そして今年度は77兆7000億円となり、財政学上の予算増大の原則からいっても20年余りで3倍の成長はかなり大きいものです。日進月歩の激動する社会で、国家的諸事業は目前にある21世紀を睨んで計画策定されている昨今です。皆さんは今日から、それぞれの定められた人生航路へ乗り出して行こうとするわけです。この記念すべき船出に当たって、一言銭の言葉を述べようと思います。

私の書近読んだ本に、相田洋(ゆたか)「電子立国日本の自叙伝」というものがあります。この本は、戦後日本のジャーナリズムの傑作の一つとして評価されているものですが、内容は電子工業が世界でいかに生まれ、日本でいかに成長したかという歴史が書かれているのです。電子工業の歴史はいかにも現代的な現象で、今この本に書かれるのにふさわしい理由があります。電子工業技術の成長がきわめて短時間であったことが、その大きな理由の一つです。

半導体あるいはトランジスターが、最初にベル研究所でショックレーらによって研究されたのは1947年です。そしてその翌年、1948年には、日本電気の技術者・長船博衛が、そして東北大学の渡辺寧、西沢潤一がこの技術の存在を知り、研究を開始しました。これらのことはこの本を読むとよく分かります。

この本の中で、会社の危機を救ってくれたのは単結晶炉を操作していた1人の女子従業員の執念であったことが、ソニーの創始者で昨年の暮れに亡くなった井深大の回顧談にあります。これには痛く感銘いたしました。それを紹介します。

当時、結晶引き上げのオペレーターは中学校を出たばかりの女性が担当していました。クリスタル・コントロールの作業は全部マニュアルでやっていました。彼女は自分がこしらえたクリスタルを最後の製品になるまで追跡したのです。自分のつくったクリスタルがどう使われるか、性能の良否はどうか、使える良品の歩留まりはどうかと。

当時その会社は朝の5時から工場が始まって、午前班と午後班と2交代で働いていたので

す。午前班は午後から、午後班は午前中に、高等学校の勉強をするといったサイクルでしたが、彼女はそのサイクルを無視して自分の作ったクリスタルを追跡したのです。彼女は自分の作ったクリスタルがよいのか悪いのか、製品の良否は工程のどこと因果関係があるのかを突き止めようとしたのです。エンジニアでないトランジスタガールがやったのです。

「一昨日作ったのは良品が多かった。昨日作ったのは悪かった。一体何がどう違っているのか」突き止めようと彼女は考えた。そして最初の製品の良否は、クリスタル製造の後の加工工程に欠陥があるに違いないと考えて追跡を始めたんですが、データが集まってみると原因はどれもクリスタルそのものにあるらしいと感じるようになった。

現場の技術者たちも最初は彼女の意見を軽く受け流していたんですが、ある日彼女のアドバイス通りやってみると、数パーセントの歩留まりが一挙に20パーセント近くまであがった。これが製品の良否と結晶製造の因果関係を調べるきっかけとなりました。

観察力と洞察力がいかに大切かを示すエピソードですね。

大学を卒業することによって、十分な教養を身につけた皆さんは、これから世の中に出て人に伍し、それぞれの地位立場に応じた責任や義務を負担していかなければなりません、そのときどきに出会う問題に対して、クリスタルの製品を最後まで追っかけたオペレーターのように、素晴らしい観察力や洞察力をもってことに臨み、仕事に対する執念のある社会人になってほしいのです。

人生行路常に順風満帆とは限りません。幾多の困難に出会うのが通常であります。これから申し上げる詩は、中国の小説家柯藍の散文詩「困難」であります、困難な事態にであったときはこの詩を思い出してください。

友よ君は仕事や暮らしの中で、  
困難にぶつかったことがあるだろう。  
私の心の中で、困難は常に勝利と共にある。  
困難、それは一筋の河。  
勝利、それは河の向こうの山。  
河を渡ればすぐ山に登れる。  
河だけが見えて、  
山が見えないのはいけない。  
しかし、山だけが見えて、  
困難が見えないのもいけない。  
困難は常に君の前に立ちほだかり、  
君の辛抱強さを試し、  
君の勇気と力を試そうとする。  
君は次第に気がつくだろう。

困難が仲間を作りたがるのを。

小さな困難は、

君により大きな困難を引き合わせる。

もし君が、何時も困難から身をかかわそうとしないなら、

困難は君にますます多くの知識と胆力を与えるであろう。

そしてついには、彼らは君に道をゆずり、君を送り出すであろう。

もし興味があるなら、君は後ろを振り返って困難という名の友人達を見給え。

困難に向かって手を差し伸べようではないか。

生活の中で、困難は君にとって最良の友なのだ。

よく皆さんは1回生として、創設期の大学の期待に応えてくれたことを感謝します。この経験はきっと諸君の前途において大いに役立つことを確信しています。幸多かれと祈ります。比治山大学の発展を見守って下さい。(H10. 3. 23)

## 平成 10 年 度

本日ここに、来賓各位のご臨席を頂き、現代文化学部234名、短期大学部433名、同専攻科5名の皆さんの卒業式を挙げることは、誠に喜ばしいこととあります。卒業にあたって、一言はなむけの言葉を贈ります。

世間の一部では、そろそろ景気の胎動を感ずるとはいわれていますが、依然として低迷する経済不況の続く厳しい世の中に変わりはありません。厳しい世の中に船出するにあたり、皆さんにまず望みたいことは、「体験に生きるな、体験だけを頼りにしてはいけない」ということです。

認知心理学のモデルで「人が何かを見たり聞いたりしてそれを記憶し、その意味する所を判断する」過程を体験というのですが、この体験なるものを人間は「体験こそ間違いないもの」と思い込んでしまう過ちを犯すことがあるのです。それは人間の判断が、単なる情報処理システムとしてしか機能しないからではないでしょうか。

解剖学者の養老孟司先生はかつて医学部の学生に口を酸っぱくして、次のようにいったそうです。「この薬を飲んだら治った、よってこの薬は効き目がある。なんて考えては絶対ダメだ。」しかし、学生たちはなぜ駄目なのか、なかなか理解できなかったようで、「先生、薬を飲んだから治ったのなら、効いたんじゃないですか」といぶかしげに問い返し、養老先生の言われることの実意が掴めなかったそうです。特に、新薬を開発するような場合、患者の中には新薬で治った人もあるが、新薬では治らない人もいるとすると、治った事例だけでは効果の証明にならないはずです。だから、治療した、治った、効果があったは「三た論法」とよんで、医療の現場では戒められていることなのです。このような過ちを論理学では「後件肯定の錯誤」というそうです。

われわれはえてして、目立つ二つのことが連続して起こると、そこに因果関係を見出そうとするものです。確かに人間のもつ学習能力のおかげで、私たちは物事に因果関係を判断したり推論したりして、危険を避け、生存に有利な条件を探し出すことができます。しかし、この働きはあまりに自動的に、そして当たり前のように働くために、実際に因果関係のない所にも単に2つのことが連続して起こったというだけで、あたかも因果関係があったかのように誤認してしまう。見たこと、覚えていることなどの体験は必ずしも確実なものではなく、基本的には懐疑的に見るのが大切なのです。それを警戒して体験の錯誤に陥らないように努めなければなりません、この心理傾向は、意図的に克服しないと脱却することはできません。そしてむしろ自分では体験しなかったことをベースにものごとを考える眼力が必要になってくるのです。

もう1つの例として、「愚者は体験から学び、賢者は歴史から学ぶ」ということについて話しましょう。ノモンハン事件というのがありました。60年以上も昔のことですが、昭和14年5月に起こった日本軍とソ連軍の戦闘です。そのとき日本軍は対ソ戦闘要綱を拠り所として戦ったが、わずか4ヶ月の間に戦死者・行方不明者を含め1万8000名もの犠牲者を出して大敗しました。戦闘に参加した兵隊の78%もの死者が出たというのですから、いかに惨めな結末に終わったか分かります。この対ソ戦闘要綱なるものは、その当時から34・5年前の日露戦争で日本が勝ったときの情報や実績を基に作ったもので、ソ連軍を甘く見た時代遅れのものでありました。

半藤一利の書「ノモンハンの夏」によると、ノモンハンとはラマ僧の役職の名前である。最高位を生き仏といい、次の位がノモンハンで、有名なラマ僧の墓があった集落にノモンハンの名がついた。昭和9年当時の地図によると、外モンゴルとの境界線上にある地点がノモンハンであった。国境線をノモンハンから西13キロにあるハルハ河の位置ときめた。しかしこの国境線は、当時満州国を守っていた日本の軍隊、関東軍が勝手に決めたもので、相手方も同意した境界線ではなかった。だから日本軍がこの13キロ地帯にいる敵を、「国境を侵した」として追い払おうとしたところ、相手方にとっては自分の領土に乗り込まれたとして、当然反撃に出てきました。そこでソ連軍と日本軍の戦闘が始まった。これがノモンハン事件の発端です。ところが、その約1年前昭和13年7月張鼓峰事件でソ連軍に痛い目に会っていました。張鼓峰事件というのは、朝鮮半島北部のソ・満国境での武力衝突です。痛い目に会った、この武力衝突は1ヶ月の戦闘で終わったのですが、この時、陸軍大臣は、本格的な武力衝突に発展する危険性を指摘され、昭和天皇から叱責されていたといいます。そのような経緯や歴史を冷静に分析・検討しておれば、日本陸軍はソ連軍の実力を知り、さらに戦線を拡大することの愚を当然悟ったはずですが。このような張鼓峰で破れた歴史の教訓を学ぼうとしないで、弱い敵と戦って勝利した時の体験のみに頼って関東軍は強気の作戦を展開し、大敗を喫したというわけです。

かくして、失敗の反省なき無謀、独善、泥縄としか言いようのない無責任体制の日本陸軍という組織が、いかに日本を壊滅させたかというひとつの見本をノモンハンにみたわけですが、60年ばかり昔の話ではありますが、憎みて余りある痛恨事であります。つまり愚者は体験から学び、

歴史から学ぼうとしなかったわけです。このことの重大さを諸君はしっかり肝に銘じてもらいたいのです。

さて、大学を卒業したということは、これは間違いなく、知識人となったのです。知識人としての衿持を保っていただきたいと思います。自分の持つ知識を他人に誇示する理由は全くありませんが、知識人であることを忘れて、いたずらに低俗に迎合すべき理由もまた全くないのです。そこで知識人である皆さんに望みたいことは、「知的虚栄心を持って」ということであります。虚栄は一般には悪徳ですが、知的虚栄心は美德の一つであると私は考えています。虚栄とは良いところを見せようとして精一杯頑張ることですから、こういった気持ちを己が知を高めるための原動力として、己が行動を律する束縛としてのエネルギーともいうべき、知的虚栄心を持っていただきたいのです。当節は、上から下まで日本國中、収賄や汚職事件が蔓延しているかのごとき様相ですが、もし知的虚栄心のひとかけらでも持ち合わせていたならば、このような事件は起こりようがなかったと思うのです。どうか皆さん、みなさんは「知識人である」今、「知識人であらねばならない」ことを忘れることなく、今後のあらゆることに対処してください。

英語で卒業式のことを「Commencement」と言います。これは本日のこのときから諸君の新しい第一歩・人生が始まるということです。「Commencement」とはものごとを開始するという意味です。では何を始めるのか。本を読むことをはじめなさい。1日1ページで良い。はじめから大物を読みなさい。読むことは影響を受けることですから、できるだけ大物を読んで、もう馬鹿なものは読まないことです。問題はどこまでも考え抜いて、図式に当てはめないことが大切です。体系は考えているうちに自然とできるもので、どんな時代でもこうして君たちのように学問をしようという人がいるのですから、真理は人類の中に見えてくる。どうか真理を見極めることのできる人に育ってもらいたいものです。皆さんの今後の精進と発展を祈ります。

(H11. 3. 23)

## 平成 11 年 度

本日ここに、来賓各位のご臨席を頂き、現代文化学部211名、現代文化研究科11名、短期大学部503名、および専攻科2名の皆さんの卒業式を挙げることは、誠に喜ばしいことであります。この中には、本学として初めての修士11名が含まれています。

2000年の幕開けはY2K対応で始まりました。次の世紀は「knowledge-based society」です。「知識の時代」「智慧の時代」と言われます。イギリスでは「learning society」になると言います。アジアの経済危機と日本の金融恐慌の兆し、政党の連合はどうなる。まことにめまぐるしく変化と再生の情勢を見せています。そして今年度国家予算は89兆9000億円となり、皆さんの生まれた頃の約27兆円に比べると、財政学上の予算増大の原則からいっても、20年余りで3倍余の成長は

かなり大きいものです。日進月歩の激動する社会で、国家的諸事業は目前にある21世紀を睨んで計画策定されている昨今です。皆さんは今日から、それぞれの定められた人生航路へ、乗り出して行こうとするわけですが、この記念すべき船出に当たって、一言、錢の言葉を述べようと思います。

私の最近読んだ五木寛之の「人生の目的」という本があります。皆さんにも、一読することを薦めますが、今日はこれを中心に話します。

思うに、すべての人は、その人なりの目標や夢をもっています。名声、権力、金、そして健康。やり甲斐のある仕事というのもあれば、愛という見えないものを必死で求める人もいます。また憎しみをバネに生きている人もいます。「目的や目標なんて面倒くさい、その日その日を漫然とすごしているのが一番さ」という人もいるでしょう。しかし、そんな暮らしを維持するのも、それはそれで、なかなか大変なことなのではないでしょうか。こうして並べたてたいろんなことを考えてみても、人生の目的というものは、それらの具体的な目標とはちょっとちがう問題のような気がするの、五木寛之だけではありません。

アメリカの心理学者マズローは、「何をしたいかを決めたい」という欲求を人間の持つ最高の欲求と位置付け、「自己実現の欲求」と言っています。「人はなんで生きるのか」という問いに対して、1960年代だと、「世のため、人のため」が多数でした。70年代を過ぎると「自分のため」「自己表現」「自己実現」へと変わってきました。自己表現にとって必要なことは、自分自身の感性や思考、経験、欲求、願望、能力をよく知っていること、「実現」の過程で生ずるさまざまな問題をよく処理できること、自分のなしたことに責任が負えることです。このように自己実現とは、すべて心愉しく気軽にできるものではありません。(理想的な自己実現の典型的な例として科学的発見や芸術作品の完成に見るように、) 実現までは苦闘の連続です。その苦闘の中で、熱中し、体験に喜びを見出せてはじめて、自己実現は可能なのです。

五木寛之は彼の父の人生について、次のように言っています。彼の父は、九州の山間部の農家から出て、師範学校の給費生として学び、坂の上の雲を目指して、一生懸命、爪で岩肌を這い登るようにがんばりがんばりしながら、一歩ずつ出世の階段を上って行きつつありました。ところが、1945年日本が戦争に負けたため、父の野心は崩れ去り、心の中に言いようもない挫折感、虚脱感そして退屈が襲ってきました。そして幾度となく深いため息をつくようになったのですが、この「ため息」をこう解釈しています。「我々は、ため息ということ自体、何でもない人間の動作のように思うかもしれないが、実は『人間が生きているということが、ため息を吐くようなこと』だということから出発するのではないか」五木寛之はこう述べています。

彼は中学一年生の頃まで朝鮮半島のピョンヤンに住んでいました。そこでその土地の民族の文化や精神の幾つかに触れる機会があったわけです。彼によると、韓国には〈ハン〉という古い言葉があるそうです。これは怨恨の「恨」と言う字ですが、ハンというのは、怨恨というものとはちがって、「一つの民族の精神の深みに宿る文化」の一つと言えるものだという事です。

韓国のお母さんは、娘にこう教えます。

あなたもいつか、これと言う理由もないのに、なんとも言えない心が萎えるような、そういう重いものを体の奥に感じる時がある。これが〈ハン〉というものだ。そういう時には、それを跳ね返そうと無理に、がんばれ、がんばれと肩肘を張ってやってもしょうがない。自分はだめだと弱気になったり、不安になったりするのもやめなさい。そういう時はハンの重さを背負ったまま、しゃがみこんで、肩を落として、「はーっ」と胸の奥から大きなため息を吐くとよい。そうすると一瞬ではあるけれども、ハンの重さと言う、肩の上に鉛の板のようにのしかかってくる不思議な心の萎えるような重さが、ほんの一寸ふっと軽くなるような気がするものなんだ。「はーっ」と大きなため息をつくことで、ハンの重さが一寸軽くなる。そしたら、そこでもういっぺん立ち上がって歩いていけばいいじゃないか。

皆さんここが大切なところです。これは、闇夜の山道を、重い荷物を背負って歩いているようなものなのです。不安と、恐怖と、脱力感で、体が振るえるのを感じず。しかし、そんな中で、ふと彼方の遠くに、小さな集落の明かりが見えたとしたらどうでしょうか。行くべき場所、帰るべき家の灯火が見える。そしていくつかの雲間から冴え渡る月光がさしてきて、足下の断崖の道も、山肌も、森もくっきりと浮かび上がる。坂を歩く労苦には変わりはない。行く先までの距離が縮まったわけでもない。荷物が軽くなるわけでもない。しかし、人は彼方の灯火に勇気づけられ、月光に思わず感謝のため息を吐くでしょう。そして再び歩き出すのです。

五木寛之はこのように父の吐くため息から民族の培った精神文化や知恵の素晴らしさを評価していますが、この話しは皆さんがこれからの人生を歩んでいくに当たってきっと参考になることではないかと考えます。

最後に、英語で卒業式のことを「Commencement」といいます。これは本日のこのときから皆さんの新しい第一歩・人生が始まるということです。「Commencement」とはものごとを開始するという意味です。では何を始めるのでしょうか。本を読む事をはじめなさい。1日1ページで良い。きっと自分の専門に関係あるものを読むでしょう。できれば得意な外国語で読むことにすればもっと望ましい。はじめから大物を読みなさい。読むことは影響を受けることだから、できるだけ大物を読んで、もう馬鹿なものは読まないことです。

ではなんのために本を読めというのでしょうか。本を読むことによって、どこまでも考え抜く力をつけなくてはならないのです。大切なことはどこまでも考え抜いて、図式に当てはめないことが大切なのです。体系は考えているうちに自然とできるもので、どんな時代でもこうして、皆さんのように学問をしようという人がいるのですから、真理は人類の中に見えてきます。どうか真理を見極めることのできる人になってもらいたいものです。皆さんの今後の精進と発展を祈ります。

(H12. 3. 23)

## 平成 12 年 度

本日ここに来賓各位のご臨席を頂き、比治山大学現代文化学部225名、現代文化研究科9名、短期大学部405名、および専攻科9名の皆さんの卒業式を挙げることは、誠に喜ばしいことであります。皆さんの卒業を心からお祝いいたします。

さて、今年度の国家予算は82.6兆円で、昨年よりは少しは減っているものの、大変な赤字予算なのです。大蔵大臣自身が「歴史に残る借金を抱える…」と言うほどの悪い状態となりました。こんな経済的にも大変な時期ですから、我々国民も今までとは全く違った生きかたを要求されるのは当然でしょう。従来のような高度成長、右上がり成長の時代はすでに過ぎ、一時もてはやされた「Japan as number one」の時代の枠組みは崩れました。そこで今や様々なリスクを乗り越え、これらを解決し、新しいアイデアを見出すことが迫られています。

世界的に有名な俳優チャールズ・チャップリンは、自伝の中でアイデアを生み出すことに関して次のように述べています。「自分はいろんな人からのインタビューで、どうしてあんな面白い映画のアイデアを思いつくのかと何度かたずねられた。今もってこれに満身に答えることはできないが、ただ永い間の経験から、アイデアというものはそれを一心に求めていさえすれば、必ず出てくるということを見出した。たえず求めているうちに、いわば心が想像力を刺激するような出来事を見張る物見やぐらみたいなものになってしまう。一片の音楽、一夕の日没がアイデアにイメージを与えることもありうるのだ…」。

諸君、私の言いたいのはここなのです。諸君の心を刺激するような対象を取り上げて、それを追求する、掘り下げる。もしそれ以上発展しそうにもないと見たら、あきらめて他の対象を探しなさい。このようにして沢山の中から1つずつふるい落としして行くことが、望む物を見つけ出す近道になるのです。では、どうやってアイデアを掴むのでしょうか。そのためには、ほとんど発狂1歩手前というほどの集中力、忍耐力が要ります。そして苦痛に耐え、長期間にわたって熱中できる能力を身につけなければなりません。

世はまさに混沌たる時代です。このような時代の社会に出て行く諸君に贈るはなむけの言葉は「信」の一字です。私は広島大学に在職中こんな経験をしました。今から約30年くらい前に、1973年ごろの話ですが、当時東南アジア諸国から留学生を迎え入れるため、学部長名でインドネシア、タイ、フィリピンなどの大学の学長に日本の国費で賄う留学生の推薦を依頼したのですが、一人の応募もありませんでした。理由は簡単です。「あなたとは面識がないから信用できない。」というのです。相手から信用されなければだめだということ、そのためには自分たちをよく知ってもらうことが大切だということに気がつきました。そこで我々はそれらの大学を訪問し、まず友人を作ること、講義をしたり、討論をすることから始め、ついに留学生を送ってもらうことに成功しました。

つまり「信」です。国と国との間に信頼関係がなくなると戦争が起こる。家庭の中で信頼関係がなくなると家庭は崩壊する。切れる子供が出現するのも、学級崩壊も同じ理屈なのです。広辞苑で「信」のところを引くと、欺かぬこと、言をたがえぬこと、まこと、信義、忠義、思い込み疑わぬことなどが挙げられています。

アメリカのライフル射撃の教本に次のような記述がありました。テキサス州のある女性が、戸外にいた娘の「ギャー」という叫びを聞きその場に駆けつけると、修理中の車の下敷きになった娘の姿を発見しました。母親は即座に車を持ち上げ、娘を引っ張り出しました。母親にそんな力がなぜ出たのでしょうか。俗に言う「火事場の馬鹿力」です。車は重くて、人間の手では到底持ち上げられないと思っているから普通には持ち上げられないのですが、「娘を助け出すためには、この車を持ち上げなくてはならない」と信じたからこそそんな力が出たのです。腕が痛い、背中が痛いということなど全く考えないで、ただ車を持ち上げる事に集中したためなのです。ライフルで的を狙うのも同じで、「当てる！ 当たる！」と信じてこそ正確な射撃ができるという教えでしょう。

もう一つの例はこうです。AとB二人の選手がいました。どちらもオリンピックになりたいと思って練習をしていましたが、二人の勝負への対応が金メダルの得失に繋がったという話です。A選手はオリンピックチャンピオンになりたいと思いながら競技に備えて練習を続けていました。B選手はimage training的に「さあ、自分はタイムマシンに乗って、未来に入ろう」と思いこみ、その未来の中でオリンピックに出て勝ったのです。そこでB選手はこう信じました。「自分はオリンピックチャンピオンだ。ただ違うことはまだそれをやっていないだけだ」。そして彼は試合の当日、「OKみんな私を見に来て下さい」と言いました。このように自分が勝利に向かいつつあると信じ込めばすべての行動も良くなり、当日勝ちに通じるパワーが発揮できるのです。

同じように信じ込むことで、現実とは正反対の現象が現れた実験もあります。アメリカの大学でクラブの入会式の行事で試みたものですが、新入生を迎え入れる部屋の中から、ギャーという悲鳴が聞こえ、痛み止めの薬を持って誰かが運び出されるのを目撃した後、部屋に入った新入生は、大きな火鉢と真っ赤に焼いた焼印を見ました。さてそこで先輩たちが氷の塊を新入生の肩に押し当てたところ、皮膚に火ぶくれができたという話です。それはその新入生は焼印を肩に当てられたと信じたためです。

世の中には理性を超えたような現象がいくらでもあるものです。我々は1秒の1千兆分の一などという単位を理解できるでしょうか。しかし、数学の理論に従えば確かに存在するのです。その極々僅かな時間の中に、ある現象が起こることも決して不可能なことではありません。これも『信』ということではないでしょうか。

私は年をとるに連れて、この『信』ということにますます心を引かれるようになりました。造性「Creativeness」を生み出す精神の否定でしかないといえるでしょう。私の信は、一切未知な

るもの、一般的な理性で理解できないものも信ずることにあります。私たちの理解を越える物も、ほかの次元世界では、いとも簡単な事実であるかもしれません。そして、我々の考えている未知の領域といわれるものこそ幸福への無限の力があるというのが私の信念です。

英語で卒業式の事を「Commencement」といいます。これは本日このときから皆さんの新しい第1歩・人生が始まるということです。「Commencement」とはものごとを開始するという意味です。では何を始めるのでしょうか。本を読む事を始めなさい。1日1ページで良い。きっと自分の専門に関係あるものを読むようになるでしょう。外国語に得意な人はできれば外国語で読むことにすれば、もっと望ましい。読む事は影響を受ける事なんだから、出きるだけ大物を読んで、もう内容の無い物は読まないことです。

諸君は本を読むことによって、何処までも考え抜く力をつけなくてはなりません。大切な事は何処までも考え抜く。体系は考えているうちに自然とできるものです。

諸君の考える力、信じる力に期待して私の饒の言葉とします。 (H13. 3.22)

## 平成 13 年 度

本日ここに来賓各位の臨席を頂き、現代文化学部220名、現代文化研究科9名、短期大学部418名、専攻科8名の皆さんの卒業式を挙げることは、真に喜ばしいことであります。この卒業式は、私にとっても最後の卒業式となりました。

この機会に、私の大学での生活を振り返ることをお許しいただきたい。

工業化された新製品が陳腐化するのに大体8年かかっておりますが、私のサイクルはこれと一致しております。皆さんも8年くらい経ったら振り返ってみてください。

I 昭和18(1943)年9月、東京工業大学を卒業しました。戦争の真っ最中に海軍燃料廠に奉職し、技術科士官として敗戦を迎えました。

混沌たる時代は小企業の製紙会社でグランドパルプを生産し、仙貨紙を漉いていました。原料の買い付けとか、製品の売込みなどに出かけたとき、「頭の下げかたが足らぬ」と、社長から小言を貰いました。「いくら嫌な相手でも丁寧に頭は下げるものだ。相手の向こうに大切な仕事がある。」「会社とは作って儲けつぶして儲けるものである。」とは社長の名言であり、儲けるために、会社はつぶれました。それから広島大学に職を求めました。

II 専任講師として採用になった2年後、昭和28年ヒューストンのRice Universityの大学院に入学しました。奨学金を貰い助手の仕事をしました。

米国に2年間留学したことは、わが生涯の最大の傑作であり、これが私の人生を形成したといっても過言ではありません。留学したことにより、生じたメリットは沢山ありますが、教育研究の手法を学びました。英語で自己表現ができるようになった事は非常に大きいメリットです。

Ⅲ 高度成長期には、その波に乗って、私の所属する化学工学科が昭和34年に新設されました。工学博士の学位を取得し、教授になったのもこの時期です。

日本が発展途上国の時代にアメリカに留学し、先進国の学問技術を学んだものですから、そのお返しをしなければならぬと考えていました。

Ⅳ 学会を通じて、台湾省立成功大学から大学院の講義の依頼が昭和42年にきました。

近松門左衛門の「国姓爺合戦」に出てくる鄭成功が大学の名前になってます。約400年前の明王朝の遺臣で台湾の支配者で、母は長崎平戸の出身でした。

この大学は、戦前の台南高等工業が改組したものであります。

この頃、東南アジアの諸国から賠償留学生というのが広島大学にきていました。日本の出先機関の領事館とか大使館が選考した日本の国費による留学生で文部省が大学に割り当てました。しかし、どうも成績がよくありません。きわめて評判が悪く、盛んに苦情が出ていました。ここで、大学推薦の留学生制度が始まることになりました。学部長名で、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイの大学の学長に留学生の推薦を依頼しましたが一人の学生も応募してきませんでした。理由は簡単です。面識がないから信用がなかったのです。そのために、それらの大学を訪問し、まず友人をつくること、講義をしたり、討論をするなど、お互いよく知り合うことが必要でした。かくして、留学生がそれらの大学から送られてくるようになりました。

昭和43年大学紛争が始まりました。最初の紛争は日本大学で起こりました。直接原因は幹部教授の脱税事件から大学の使途不明金の存在が明らかとなり、その問題をめぐり学生集団と総長との大衆団交となりました。東京大学では医学部の研修医問題が発端で安田講堂を占拠されました。そして、東大の入試は中止されました。この頃紛争中の大学は50を越していました。広島大学では教養部学友会の全学共闘会議いわゆる全共闘の8項目要求が発端でした。全共闘は大学を封鎖しました。

広島大学の改革では、「西条に統合移転する」ことがS48に決まりました。

V 私が工学部長のときに、大学の移転の順番を決める問題がありました。重たいものから先に運ぶなら、工学部が1番になる。当時の工学部には早く移転したい理由がありました。昭和52年に博士課程の設置がきまり、約50%の教員増となったので、施設設備がすべて狭隘となっていました。

57年に工学部は移転しました。この頃私は学長でありました。工学部にとって移転先発のリスクは大きかったです。10年経っても次の学部がなかなか移転してきません。理由は予算にありました。

移転の予算は跡地処分で購入になっていました。ところが、広島市から跡地をただで返せと横槍が出ました。工学部の前身校である広島高等工業学校誘致に際して寄付した土地がありました。これを只で返せというのです。この問題が解決しない限り、移転の予算は出てきま

せん。紛争中に学生が警察と市街戦をやりました。道路にしかれたタイルをはがして投げたのです。大学を封鎖して籠城したときは、盛んに騒音を流しました。これらのことが、大学を市内から追い出そうというほど、市民から嫌われてしまって、移転地探しにおいて便宜供与は広島市からうけることができなかつたばかりか、跡地処分の横槍まで頂きました。私には、どう考えても広島市の嫌がらせとしか思えませんでした。移転は終了するまでに22年かかっています。これはどう見ても長すぎました。

VI 三次庄原地区に大学がないということから始まり、備北大学誘致運動が功を奏して広島県立大学ができることになり、設立準備室の仕事を3年余り手伝いました。平成1年から学長となるのでありますが、この大学では広島大学にはない学科を作ろうということですから、当時の先端技術、バイオと情報を目玉にして学科の構成をしました。大学設置には大学設置基準というのがあって、決められた領域の教授がいないと文部省からOKが出ません。経営学総論の教授がなかなか見つからなくて東奔西走しました。

開学最初の年はセンター試験がありません。試験科目を私立大学並みの2科目にしたこともあって、志願者が100倍を超える学科もありました。そのため、入試のときは会場と監督の手配が大変でした。

VII 比治山女子短期大学の一部を改組して、平成6年比治山大学ができました。スタートして間もない平成7年から学長になりました。私立大学は国公立大学とは様子が違います。いろいろ戸惑うこともありました。

少子化の声と大学の危機が叫ばれた7年間でした。この間、男子学生の受け入れができ、大学院の設置を見ることができました。本学教職員の皆さんのご支援の賜物と厚く感謝しつつ、サイクルの節目に到達したことを喜んでいきます。

さて、式辞の締めくくりとしての、饞の言葉は、ギリシャ神話のヘラクレスの話です。

ある日ヘラクレスが、山腹で家畜の番をしていると、二人の美しい乙女が近づいてきました。一人は粗末な白い着物を着たおとなしい娘でしたが、もう一人は派手な服を着て、宝石をいくつも着け、顔には化粧もしていました。

派手な服を着た女は元気良く近づいて来ると、女友達の先を越してヘラクレスにいました。

「ヘラクレスさん、あなたはもう自分でどういう生活をおくるか、それを決める年頃になったのです。さあ、私をお友達にきなさいな。そうしたら私、きっとあなたをいちばんたやすい、そして楽しい道に案内してあげます。いろいろ楽しい思いをして、苦労や難儀はしないですみます。あなたは他人のことなど少しも考えないで、一生自分の楽しみだけ追っていけばいいのです。私を愛してくれる人たちは、私のことを〈幸福〉と呼びます。私を好かない人たちは、別の名前呼びますけれど。」

その間にもう一人の娘が近づいてきていました。「ヘラクレスさま、私も一つの道をあなたにすすめます。あなたはメドウサを退治したバルセウスの子孫ですもの、立派な仕事をして後の

世まで名を残すべきです。でも、りっぱな仕事は努力と苦勞なしではし遂げられませんよ。あなたは人々のために役立つことを考えて。あなたの力とわざとを正しく用いなければいけません。私の友達の言うことを聞いては駄目よ。あの人は〈悪〉とか〈愚か〉とか呼ばれる人です。努力と苦勞なしでは、本当の喜びも幸福ありませんよ。」

するとさっきの娘が、せき込んでいました。「この人のいうことをきいては駄目。その人は〈徳〉と呼ばれているけれどさ。幸福に行き着くには、私の道のほうがずっと楽で、近いのです。あの人の道はつらくて長くて。しかも幸福に行き着けるかどうか。それが怪しいのよ。」

しかし、〈徳〉は静かに言いました。「ではヘラクレスさん、わたしたち二人のどちらに従うか、おきめなさいな。あの人の道はたいらでやさしくて、みんなが求めるのだけれど、つまらない喜びしかありません。私の道は苦しくてつらいけれど、ゼウスがあなたに望んでいるのは、きっと私の道ですわ。」

ヘラクレスは叫んだ。「僕はあなたの道を選びます！ どんなに苦しいことがあろうと、僕はもう途中で引き返しはしないぞ！」

どうぞ皆さん！ これから始まる長い人生は、ヘラクレスになって、幾多のサイクルで起こる苦勞と戦ってください。健康にはくれぐれも留意してください！ 皆さんの健闘を祈って式辞を終わります。

(H14. 3.22)